

週刊新潮

4月15日号
440円

記事の
ラインナップを
WEBで公開中!



15

池江に続いて完全復活を!



えたな、と感じます」と話す。事実、3月だけ見ても、5日には都内のイベントに出席し、青山学院大学陸上競技部の原晋監督らと意見交換。17日には日本テレビ系の情報番組「スッキリ」に生出演し、23日には定例会見で五輪について「選手らを」全力でサポートする」と表明。25日には福島県のJヴィレッジで行われた聖火リレーの出席式に出席。そして、4月1日の訓示であった。

方がおかしくなっていて、転んだりもしたために検査を受けたところ、脳腫瘍の疑いがあったのです。すぐに開頭手術を受けると、脳腫瘍ではなく、脳原発性の悪性リンパ腫でした」と明かすのは、都内のさる病院の関係者である。くどうちあき脳神経外科クリニックの工藤千秋院長に補ってもらおうと、

「発症者は10万人に一人といわれるほど稀な病気で、実際、発生頻度は脳腫瘍の2〜4%程度、脳以外で発症する悪性リンパ腫の1%未満とされます。脳にはリンパ組織が存在しませんが、それなのに悪性リンパ腫が発生する原因は明らかになっていません。発症しやすいのには45〜80歳。悪性リンパ腫一般はリンパ節にできることが多く、ほかのリンパ節や内臓に転移しますが、脳リンパ腫は脳を中心とする中枢神経や脊髄腔、眼球内への転移にとどまり、ほかの組織には影響を与えません。そのかわり増殖が速く、放置すれば数カ月で亡くなることもあります。中枢神経に発生するので、頭がぼんやりしたり、言語障害を伴ったりします。脳内で悪性リンパ腫の細胞が増えると脳が圧迫され、頭痛や嘔吐、痙攣や目が見えにくくなるなどの症状も報告されています」

「最後の移植だけが怖い」

「脳原発性悪性リンパ腫の治療は放射線治療と、メソトレキセートを投与する化学療法が一般的です。脳原

発症の場合、このメソトレキセートが最も効果的だとされています」

ることはなさそうだが、この話からわかるように骨髄の細胞移植が必要だという。先の病院関係者が言う。「室伏さんは3月中旬、自身の骨髄の細胞を取り出す手術を受けました。『スッキリ』に出演する前だったかと。その後、イベントをいくつかこなした後、4月半ばに再び入院する予定です。その際は、まず抗がん剤を大量に投与した後、取り出した骨髄の細胞を点滴で移植します。自家末梢血幹細胞移植という治療法で、池江選手のように他人の骨髄の細胞を移植する。同種移植に比べ、自分の骨髄の細胞を移植する。自家移植は、副作用のリスクが低いと聞きます」

「この治療の場合、点滴で骨髄を移植した後、抵抗力がゼロになる。だから2週間ほど無菌室で入院するはず。ただ、そこを乗り越えられれば完治すると思えます。論文によれば、この治療法での再発率は0%だといえます」

「全力で努めてまいります」

「室伏さんは元気に五輪を迎えられると思いますが、免疫力の問題は少し心配です。退院後は当分の間、抵抗力が落ちるので、大勢の人がいるところを歩くのは勧められません。特にいまはコロナの問題がありますから、そこはリモートを駆使するなどして、周囲が温かく支えてあげる必要がありますように思います」

「室伏さんは元気に五輪を迎えられると思いますが、免疫力の問題は少し心配です。退院後は当分の間、抵抗力が落ちるので、大勢の人がいるところを歩くのは勧められません。特にいまはコロナの問題がありますから、そこはリモートを駆使するなどして、周囲が温かく支えてあげる必要がありますように思います」

「個人に関する情報であるため、回答を差し控えています」とのことだったが、希望も得られた。体調不良が東京五輪に影響を与えることへの懸念に対し、室伏長官の見解を聞いた、という問いには、力強い答えが返ってきたのである。「これまでも公務に支障をきたさないよう努めており、今後もオリンピック・パラリンピック東京大会の開催に向けて、関係者と一丸になって全力で努めてまいります」